

対照研究と文法理論(二): Xバー理論

湯廷池

東吳大学兼任教授

【中文摘要】X標槓理論是由詞組成分的上下支配關係來分析詞組成分的階層組織，內容可由下列規律母式來表式：

a. $XP \rightarrow [\text{Spec } XP], X'$ (詞組 \rightarrow 指示語, 詞節)

b. $X' \rightarrow [\text{Adj } XP], X'$ (詞節 \rightarrow 附加語, 詞節)

c. $X' \rightarrow [\text{Comp } XP], X$ (詞節 \rightarrow 補足語, 詞節)

其中 X 表變數，使句法現象能加以「跨詞類條理化」。而任何詞組結構的主要語必須與補述語、附加語共同形成「同心結構」。詞組結構中每一個節點至多只能分為兩枝，同時在同一個詞組結構中，只能有一個主要語 (X, X') (此外，由上述規律母式中的 b 式我們看到， X' 同時出現於 ' \rightarrow ' 的左、右端，附加語理論上可以反覆衍生。

【關鍵字】詞組・詞節・詞語・主要語・附加語・補述語・同心結構。

1.0 「Xバー理論」(X-bar theory)

元來是「D 構造」(D-structure) の「句構造」(phrase structure) の「合格条件 (well-formedness condition) を規制する制約、しかし「構造保持の仮説」(the Structure-Preserving Hypothesis) に依り、「付加」(adjunc-

tion)の結果生成される「付加構造」(adjoined structure)のような極く少数例外を除いて、これらの制約は原則的に「中間構造」(intermediate structure)、「S構造」(S-structure)の合格条件にも適用される。「Xバー公約」(the X-bar convention)の具体的に内容は学者により多少異なった内容や主張がある。

1.1 「標準的 Xバー理論」(Chomsky 1972, 1986)

(1)a. $XP \rightarrow [_{\text{Specifier}} P^*], X'$

b. $X' \rightarrow X, [_{\text{Complement}} P^*]$

上のルール・スキーマ (rule schema (ta)) において、X は名詞 (N)、動詞 (V)、形容詞 (A)、前置詞・後置詞 (P)、屈折辞 (I)、補文化辞 (C)、限定詞 (D)、数量詞 (Q) 等の「変数」(variable)を表し、XP (X"や \bar{X} の記号で代表されることもある)は「最大投射」(maximal projection)、X' (\bar{X})は「中間投射」(intermediate projection)、X (X^0)は「最小投射」(minimal projection) 或いは「主要部」(head)を表す。(1)のルール・スキーマは自然言語の統語的要素 (即ち句構造)はすべて主要部、補足部、指定部という三つの要素からなり、すべての個別言語はこれらの要素の「左右行列の順序」(linear order)を除けば基本的に同じであり、またすべての句 (XP)はその種類を問わず、基本的にパラレルな内部構造を持っていることを示す。XP、X'、Xに共通するXは、これらの構造が「内心構造」(endocentric construction)であることを表す。これはとりもなおさず、自然言語の句構造に「外心構造」(exocentric construction)は原則的に存在しないことを意味する。また 'XP*' の右肩に表記された「クリーネ・スター」(Kleene star;*)はゼロ及び任意の正整数を代表し、補足部や指定部の位置に表われる統語範疇の種類や数は最大投射でさえあれば原則的に何制限もなく、主要部に関連す「語彙記載」(lexical entry 例えば「下位分類フレーム」(subcate-

gorization frame) や「 θ 理論」(θ -theory) 等によって D 構造、S 構造、論理形式 (LF)、音声形式 (PF) 等に引き継がれる。

1.2 「改良的 X バー理論」(湯 1988, 1989 a, 1989 b)

(2)a. $XP \rightarrow [\text{Spec(ifier)} XP], X'$

b. $X' \rightarrow [\text{Adj(unc)t} XP], X'$

c. $X' \rightarrow X, [\text{Comp(lement)} XP], X$

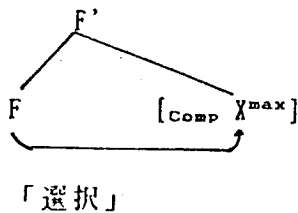
(2)のルール・スキーマと(1)のルール・スキーマの異なる点は、補足部と指定部の外に「付加部」(adjunct)が(2b)によって設けられ、この規則の「書き直し矢印」(rewrite arrow; \rightarrow)の左辺と右辺共に X' が現われることから、付加部が理論的に無限に拡張することが許される。また補足部、付加部、指定部に現われる構成素が最大投射 (XP) に限られることは(1)の如くであるが、XPの右肩にクリーネ・スター (*) がついていないことから、その数が一つに限られていることが分かる。これは自然言語の句構造が必然的に「二叉枝分れ」(binary branching)であることを示す。この意味で、(2)の改良的 X バー理論は内容的に標準 X バー理論の不備 (付加部の反復生成を許さない) を補うと同時に、理論的にも(1)の理論に比べてもっと厳格な制約 (すべての節点において二叉以上の枝分れを許さない) を加えていると言えよう。

1.3 「相対化 X バー理論」(福井 1986, 1988, 1989)

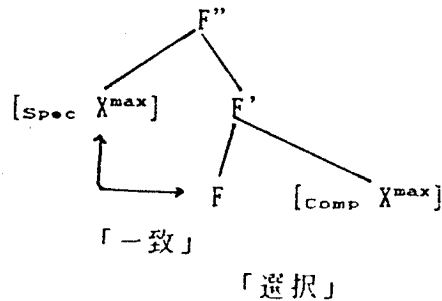
主要部 (X) の投射を名詞 (N)、動詞 (V)、形容詞 (A)、前 (後) 置詞 (P) のような「語彙範疇」(lexical category) と、補文化辞 (C)、屈折辞 (I)、限定詞 (D) 等を含む「機能範疇」(functional category) の二種類に分ける。語彙範疇は思考表現の核として機能する要素であり、それ自身固有の意味を (例えば「 θ グリッド」や「語彙概念構造」(lexical-conceptual structure)) 持つ。また語彙範疇はその語彙的特性に従って補足部を取り、「バーレベル 1」(bar-level one) まで投射する。そしてこのバーレ

レベル1の段階において（理論的には無限に）「繰り返し」（recursion）を許す。一方、機能範疇は語彙範疇が持つような固有の意味を持たず、その主な役割は複数の構成素（例えば C、I、D とそれぞれの指定部）を文法的に一致や選択などの統語関係を介して結び付けることにある。機能範疇はまた主要部が「一致素性」（agreement feature）を持つ場合（例えば C が ‘[+ Wh]’、I が時制動詞の ‘Agr’、D が所有皮の ‘-’ s’ である時）に限り、バーレベル1よりも更に高いバーレベル2にまで投射し、そこで範疇投射が「閉じられる」（be closed）。しかし機能主要部が一致素性を持たない場合（例えば C が ‘that, for’、I が不定詞の ‘to’、D が冠詞の ‘the, a (n)’ である時）は、語彙範疇と同様に、バーレベル1までしか投射しない。「選択」の内容や「繰り返し」の可能性は「投射原理」（Projection Principle）や「完全解釈の原理」（Principle of Full Interpretation）等によって制約される。

(3)a.



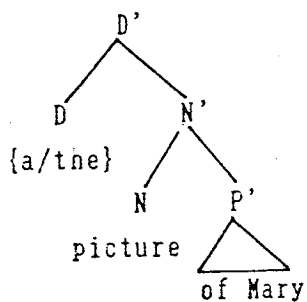
b.



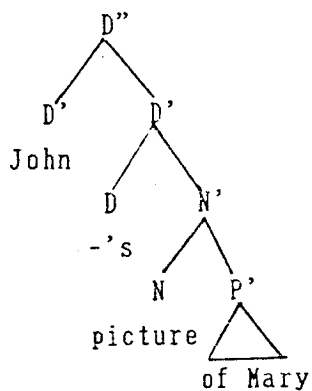
（主要部が一致素性を持たない場合）（主要部が一致素性を持つ場合）

(4) 限定詞句 (名詞句)

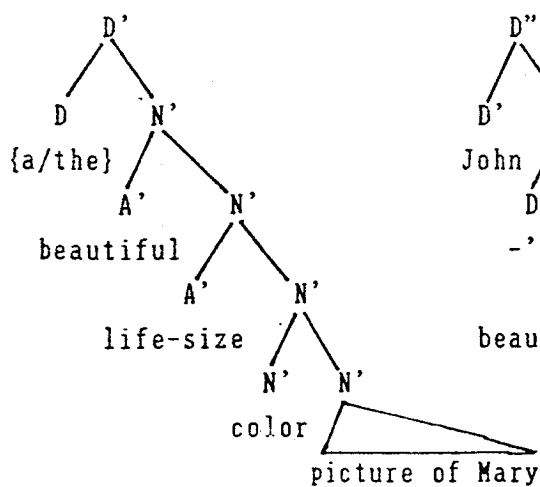
a.



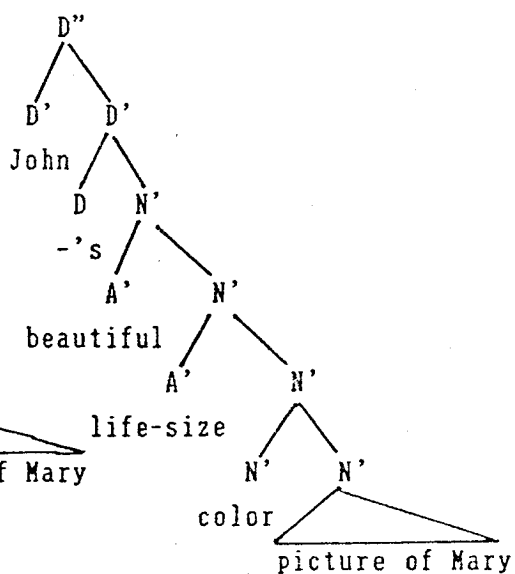
b.



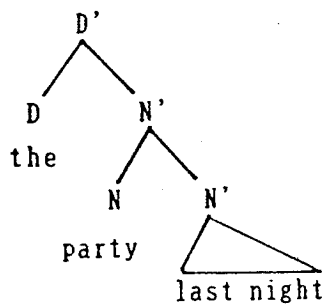
c.



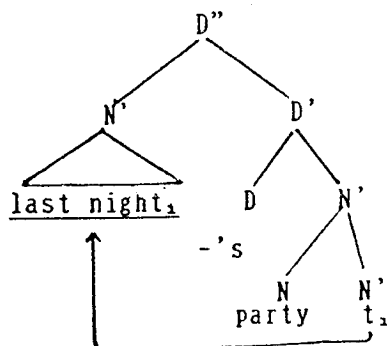
d.



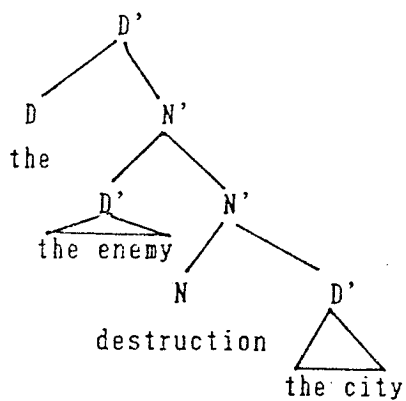
e.



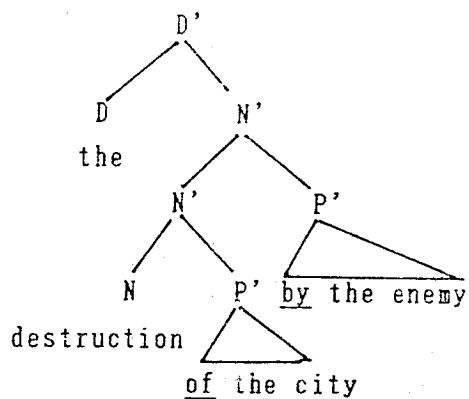
f.



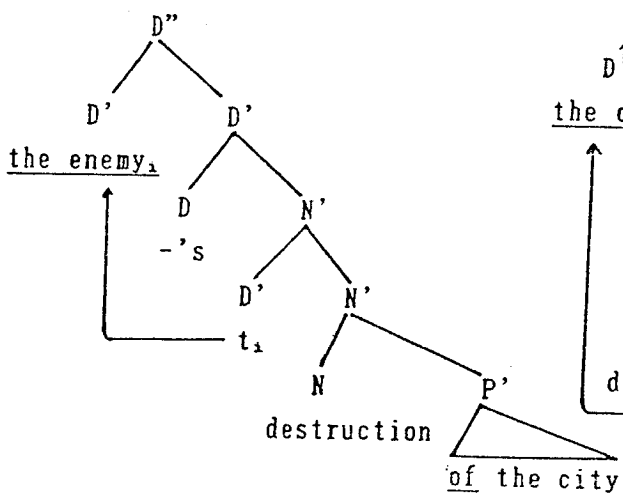
g.



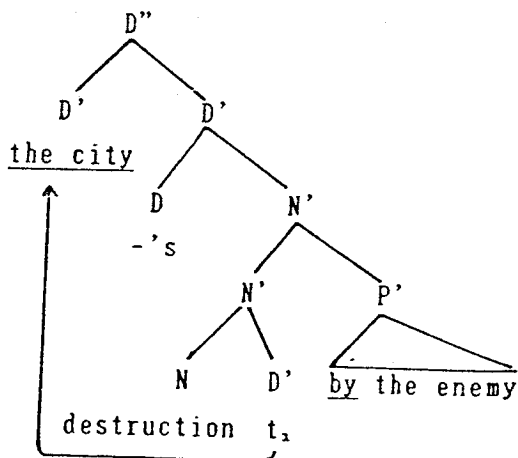
h.



i.

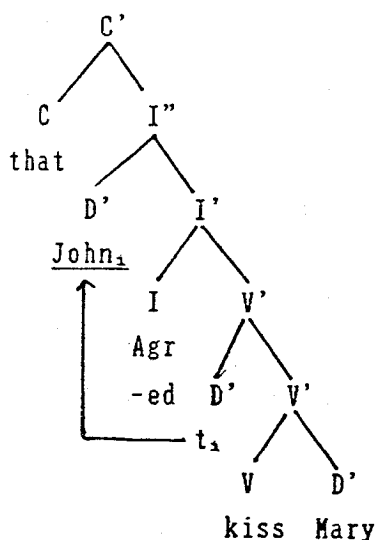


j.

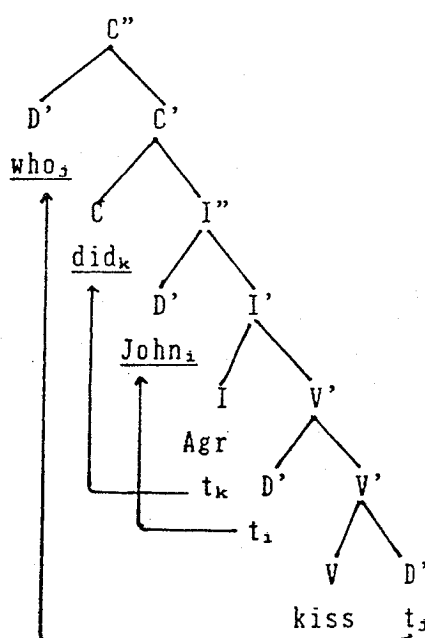


(5) 文 (節)

a.



b.



「VP内主語の仮説」(the “VP-internal subject” hypothesis)

2.0 「相対化Xバー理論」による英・日・中国語「類型」(typology)の対照分析

「パラミトリック統語論」(parametric syntax) (福井 1986, 1987, 1988, 1989) ; 「比較統語論」(comparative syntax)

2.1 統語的「WH 移動」(WH movement) の義務的あるいは任意的適用

- a. 英語 : 「wh 疑問文」(wh-question) の wh 要素は「問い返し疑問文」(echo-wh-question) のような場合を除き、必ず文頭に移動しなければならない。
- b. 日本語 : wh 疑問文の wh 要素を義務的に移動する必要はない。
- c. 中国語 : wh 疑問文の wh 要素を統語的に移動する必要はない。ただ「不

定」(indefinite) 或いは「配分」(distributive) 用法の疑問詞（‘誰、什麼（{人／東西／地方}）’）は必ず述語動詞の前か文頭に現われなければならない。

（以下例文はなただけ福井（1989）所掲の例文を参照することにする。）

(i)a. John bought what? / What did John buy t?

b. John は 何を 買ったのか? / 何を John は t 買ったのか?

c. John 買了 什麼（東西）? / ^(?)什麼（東西） 你 買了 t?

(ii)a. I don't know what John bought t.

b. 僕は、John が 何を 買ったのか 知らない。／

僕は、何を John が t 買ったのか 知らな。／

c. 我 不知道 John 買了 什麼（東西）。／

? 我 不知道 什麼（東西） John 買了 t。

(iii)a. I don't want to buy {anything / *whatever}.

* {Anything / Whatever} I don't want to buy t.

b. 僕は、何も 買いたくない。／

何も 僕は t 買いたくない。／

c. 我 不想 買 {任何東西 / *什麼東西}。

我 {任何東西 / 什麼東西} 都 不想 買。

{任何東西 / 什麼東西} 我 都 不想 買。

福井（1989）の「機能範疇パラミター化の仮説」(the functional parameterization hypothesis) : 英語の核語彙には機能範疇が存在するが、日本語の核語彙には機能範疇が欠如している。英語の機能範疇である補文化辞 (C) に一致素性が [+wh] が含まれていれば、義務的に wh 要素の移動を引き起こす（「一致の原理」(the principle of agreement) : 文法的な一致関係 S 構造において満たさなければならない）。一方、日本語には機能範疇が根本的に欠如しているので、一致素性もなく、従って wh 要素の義務的移動もない。(cf. 「代りの仮説」(alternative analysis) : 日本語の核語彙に機能範

畴は存在しているが、それらの機能範疇は文法的・一致現象を引き起こさない。))

日本語 (や中国語) における wh 要素の移動は「かきまぜ規則」(Scrambling) (や「動詞句付加」(VP-adjunction)、「節付加」(IP-adjunction)) によって「音声形式」(PF) において行われるものとする。

2.2 「虚辞」(expletive; pleonastic) の有無

- a. 英語: それ自身の内在的意味 (例えば指示対象や θ 役割) を持たない 'it' や 'there' のような虚辞が存在する。
- b. 日本語: 英語の 'it' や 'there' に対応するような虚辞は存在しない。
- c. 中国語: 'it' や 'there' のような虚辞は存在しないが、音声形態を持たない (PRO や pro と異なる) 虚辞は存在しないのだろうか。

(i) a. It seems that John is competent.

b. John は 有能そうだ。

c. John 好像 很能干。

(ii) a. There is a book on the desk.

b. 机の上に 本が ある。

c. 桌子上 有 一本书。

(iii) a. It is very possible that John will come.

b. John は 恐らく 来るだろう。

c. (e) 很可能 John 會来。 / John 很可能 (t) 會来。

福井 (1989) の分析と説明: 英語の機能範疇である屈折辞 (I) に一致素性 (Agr) が含まれていれば、節 (IP) の指定部の位置に義務的に主格を付与しなければならない。従って、節の指定部に「外在的 θ 役割」(external θ -role) を擁する名詞句が存在していなければならない、それが存在しない場合には、 θ 役割を持たない虚辞をあてがわねばならない。一方、日本語には機能範疇が存在しないので、一致素性もなく、虚辞の存在を必要とし

ない。

日本語の主語は格助詞‘が’（主題化した場合は係り助詞‘は’）から主格を与えられる。中国語にも一致素性（Agr）が存在しているという確然たる証拠がないので、D構造で動詞句の指定部の位置に現われている外在項名詞句が、S構造で格付与を必要としない節の左端の位置（「非項位置」（*non-position*））に付加されるという分析が試みられている（湯（1989）参照）。

2.3 「多主語構文」（multiple “subject” construction）の有無

- a. 英語：英語においては、一般に一つの文に二つ以上の主格名詞句（節主語）、あるいは一つの名詞句に二つ以上の所有格名詞句（名詞句主語）が連続することは許されない。
 - b. 日本語：日本語においては、節や名詞句における多主語構文の例文は、非常に自然な日本語の文とは言い難いが、英語の例文に比べて容認可能性はるかに高い。
 - c. 中国語：中国語においても、日本語と同じく、「関与条件」（*Aboutness Condition*）が許容する限り、多主語構文がある程度認められている。しかし、主語名詞句の数（殊に節主語の数）はせいぜい二つに限られ、それより多くの主語が連続すると、容認可能性はずっと落ちる。これは統語的な制約というよりも、「知覚策略」（*perceptual strategy*）に関係した語用的な制約に基づくものだろう。また中国語の場合、「多主語構文」と呼ぶよりも、「多話題構文」（*multiple topic construction*）と呼んだ方が適当であろう。
- (i) a. *Civilized countries, male, the average lifespan is short. (*It is civilized countries that men, their lifespan is short.)
b. ^(?) 文明国が、男性が、平均寿命が 短い。(Kuno 1973)
c. [?] (在) 文明国家 (裡), 男性, (他們的) 平均寿命 較短。
 - (ii) a. *Keio University' s last week' s Professor Yamada' s that lecture

b.^(?) 慶応大学（で）の、先週の、山田教授の その講義

c.^(?) （在）慶応大学的、上週的、山田教授的 那一堂講課

福井（1989）の分析と説明：英語の主語はD構造で動詞句の指定部の位置に外在項として生成され、そこで外在 θ 役割が付与される。この主語はS構造で節の指定部の位置に移動され、主要部である屈折辞の一致索性（Agr）から主格が付与される。また英語の節は機能範疇なので、指定部は一つしかなく、それで範疇投射を閉じる。このために、英語の主語の数は一つに限られ、多主語構文を許さない。一方、日本語には機能範疇に属する節（I', I''）は存在せず、主語はD構造でも、S構造でも動詞句の動詞に最も近い指定部の位置に現われる。また日本語の動詞句は語彙範疇であるので、バーレベル1の段階において「繰り返し」を許し、動詞句の主語の上に（理論上はいくらでも）他の最大投射が現われ得ることになり、いわゆる「多主語構文」を生成する。（節主語には“次の環境に格助詞‘が’を挿入せよ：{N^{max}/P^{max}}—{V' / A' }”、名詞句主語には“次の環境に格助詞‘の’を挿入せよ：{N^{max}/P^{max}}—N' ”という「マーキングの規約」（Case-marking Convention）によって主格助詞‘が’と所有格‘の’がそれぞれ付与される。）なお中国語においては、特別に主格を表す助詞はなく、文頭に起こる名詞句や前置詞句は、主語というよりも、話題と呼ぶ方がふさわしい。（ic）の中国語の例文も日本語の“文明国では、男性は、（女性よりも）平均寿命が短い”に対応するものと思われる。

2.4 「かきませ現象」（scrambling）或るいは「自由語順現象」（free order）の有無

a. 英語：英語は「間接目的語移動」（Dative Shift）、「重量目的語移動」（Heavy NP Shift）、「名詞句からの移動」（Extrapolation from NP）、「話題化変形」（Topicalization）、「不変化詞移動」（Particle Movement）等少数の変形を除いては、構成素の移動は比較的不自由である。殊に文

頭に移動する話題化要素は一つに限られ、複数の要素を随意に文頭に移動することは許されない。

b. 日本語: 日本語は“句の主要な要素（即ち範疇投射の主要部）がその句の最後に現れる”という条件を守っている限りにおいては、比較的自由な語順を許す。また前述の多主語構文に見られるように、複数の要素を随意に文頭に移動することも許されている。

c. 中国語: 中国語の語順は日本語の語順ほど自由ではないが、英語の語順に比べればかなり自由である。目的語は前置詞（例えば‘把、对’等）の力を借りて述語動詞や形容詞の直前に現れることができるし、話題化変形も複数の要素を文頭に移動することを許す。

(i)a. John burned the books in the basement.

b. The books, John burned t in the basement.

c. In the basement, John burned the books t.

d. * The books, in the basement, John burned t t.

e. * In the basement, the books, John burned t t.

(ii)a. John が 地下室で それらの本を 焼却した。

b. John が それらの本を 地下室で t 焼却した。

c. それらの本を John が t 地下室で 焼却した。__

d. 地下室で それらの本を John が t t 焼却した。__

e. それらの本を 地下室で John が t t 焼却した。

f. 地下室で John が t それらの本を 焼却した。

(iii)a. John 在地下室裡 燒毀了 那些書。

b. John 在地下室裡 把那些書 燒毀了。

c. 那些書, John 在地下室裡 燒毀了 t。

d. 在地下室裡 John t {燒毀了 那些書 / 把那些書 燒毀了}。

e. 把那些書, 在地下室裡, John t (把 t) 燒毀了 (t)。

f. 在地下室裡, 把那些書, John t (把 t) 燒毀了。

福井(1989)の分析と説明:「自由語順」の現象も「多主語構文」と同じように、英語の文は節(I', I')からなり、日本語の文は動詞句(V')からなることで両語間の相違点が説明される。英語の節と文(C', C'')は機能範疇であるため、バーレベル1の段階における「繰り返し」は許されず、話題化変形で移動された要素の落ちつく先(即ち「移動先」(landing site))は文の指定部の位置だけしかない。従って、英語の話題化による文頭への移動要素はただ一つのみに限られる。(福井(1989)は英語の話題化を「付加操作」(adjunction operation)と分析し、付加操作はひとつの範疇につき一回に限るという Guéron d May (1984) の制約を挙げて、英語の話題化移動は一回しか許容されないという説明をしている。)一方、日本語の文は語彙範疇に属する動詞句からなるので、バーレベル1(V')の段階において繰り返しが許され、目的語と主語を除くその他の構成素が指定部の位置に自由な順序で現れることになる。

しかし、目的語は「内在項」(internal argument)として動詞の補部の位置に、主語は外在項として主要部動詞にもっとも近い指定部の位置に現れねばならない。従って、目的語、主語とその他の構成素との左右順序を「かきまぜる」ために、どのみち「動詞句付加」(V' - Adjunction)の移動変形に頼らねばならない。移動変形の必要性を認めることは、一面機能範疇欠如による日本語自由語順に関する説明力を弱める結果になる。また中国語の比較的自由的な語順を説明するためにも、「節付加」や「動詞句付加」による移動変形に訴える方が自然且つ合理的なように思える。(「付加操作」はひとつの範疇につき一回に限るという制約の実証性と普遍性に関する討論には暫くここで触れない。)日本語の自由語順現象はXバー理論から導き出すよりも、日本語名詞句の格付与は(英語のように動詞や一致素性に力を借りず)もっぱら格助詞に頼っており、格助詞さえ同伴しておれば文

の如何なる位置に現れても「格フィルター」の違反にならないという事実
に重点を置く方がよいのではなかろうか。

2.5 「主語・助動詞転換」(Subject-Aux Inversion) の有無

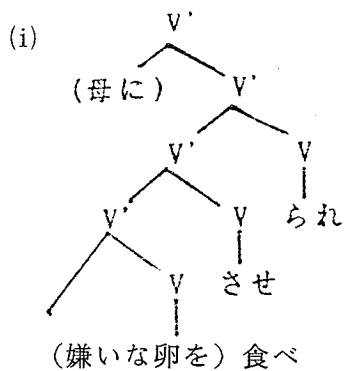
- a. 英語: 英語は直接疑問文を形成する場合、‘(単純時制の) Do’、‘(完了時制の) Have’、‘(進行時制と述語の) Be’ 及び will, may, can, must’ などの法助動詞に時制、人称、数などの変化を加え文頭（正しくは補文化辞 (C) の位置）に移動しなければならない。
- b. 日本語と中国語: 日本語と中国語には「主語・助動詞転換」のような統語的操作はなく文末にそれぞれ疑問を表す終助詞‘か’と‘嗎、呢’などを付加することによって疑問文を形成する。(日本語の場合は直接・間接疑問文ともに疑問の終助詞を付加し、中国語の場合は直接疑問文のみ疑問の終助詞を付加する。)
- (i) a. Did John t propose to Mary?
b. John は Mary に プロポーズしました か?
c. John 向 Mary 求婚 嗎?
- (ii) a. When will they t get married?
b. あの人達 いつ 結婚します か?
c. 他們 什麼時候 結婚 呢?
- (iii) a. I don' t know [when {they will / *will they} get married]
b. 僕は [あの人達が いつ 結婚するのか] 知らない。
c. 我 不知道 [他們 什麼時候 結婚 (* 呢)]。
- 福井 (1989) の分析と説明: 英語の「主語・助動詞転換」は機能主要部 I から機能主要部 C の位置への「主要部 (から主要部への) 移動」(Hesd (-to-Head) Movement) と分析される。機能範疇の存在しない日本語に、I (移動される要素) も C (移動先) もあろうはずがなく、従って「主語・助動詞転換」も存在しない。中国語にも日本語と同じような解釈が成り立つ

が、湯（1988）は中国語の終助詞は文の主要部（即ち補文化辞）の位置に現れ、また補文化辞は節の右端の位置に現れるという論証を試みた。この分析のもとでも、右から左に移動する「主語・助動詞転換」の可能性は起らない。

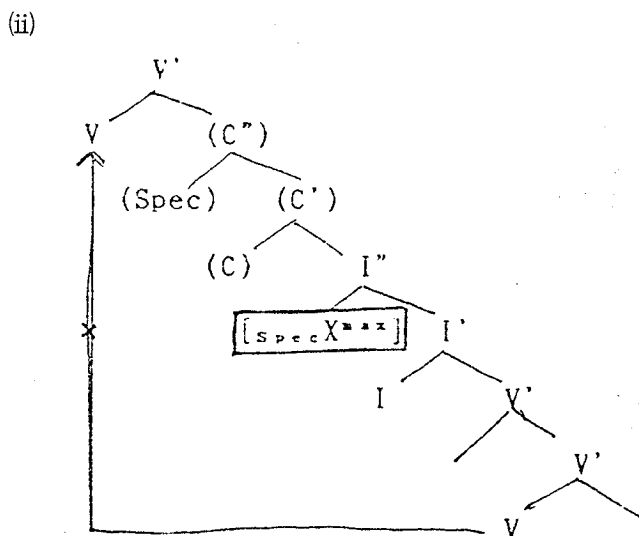
2.6 「複合述語」(complex predicate) の有無

- a. 日本語：日本語には「受け身の形態素」「られ（-(r)are-」や「使役の形態素」「させ（-(s)ase-）」など他の述語と結合して生産的な複合述語を形成するプロセスが存在する（例：‘食べ－られ－た、食べ－させ－た、食べ－させ－られ－た’）。
- b. 英語：英語には日本語に見られるような生産的な複合述語を形成するプロセスは存在せず、「複合動詞」(compound verb) の数も非常に少く、その少数の複合動詞も殆どが複合名詞（例：‘mass production>mass-produce’）や複合形容詞（例：‘house-broken>house-break’）からの「逆形成」(back-formation) によって生成されている。
- c. 中国語：中国語に複合述語が存在するや否やに就いては、複合述語の定義や分析について学者間に異論がある（湯（1990）参照）が複合動詞は数多く存在する。

福井（1989）の分析と説明：日本語の複合述語の形成はVからVへの主要部移動として分析され、‘食べさせられ（た）’という複合述語の句構造標識は次のようになる。（使役の形態素‘させ’、受け身の形態素‘られ’はそれぞれ動詞句（V’）を補足部として取るように分析されてある。）

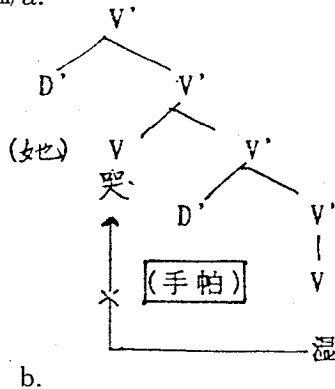


(string adjacency; 即ちこのような操作は一般の主要部移動操作と異なり、他の要素を飛び越えては行われぬ) という非常に強い「局所性条件」(locality condition) に従わねばならないと主張する。日本語の複合述語形成は、この条件を守っており、従って許容されるべき文法操作である。一方、英語において同様の操作を行おうとすると、(ii) の句構造標識の如くどうしても他の要素を飛び越す結果になり、「記号列上の隣接性」に違反してしまう。(仮に上の V (移動先) が直接 I " を補足部として取ると仮定して見ても、下の V への移動の際に、どうしても四角形で囲んだ I " の指定部の位置にある主語を飛び越えることになってしまう。)

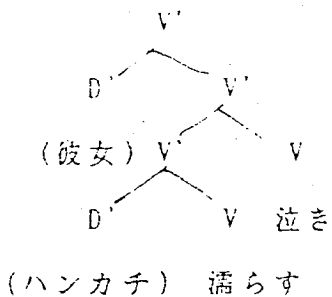


中国語の「能格複合動詞」(ergative compound verb; 例えば‘哭湿(手帕)’ = ‘(ハンカチを) 泣き濡らす’、湯(1990) 参照) を仮に複合述語とみなし、これを福井氏の分析に従って生成して見ると、次のような句構造標識になる。(参考のために中国語の複合動詞‘哭湿’に対応する日本語の複合動詞‘泣き濡らす’の句構造標識を一緒に並べる。)

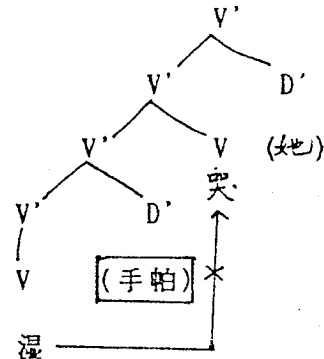
(iii) a.



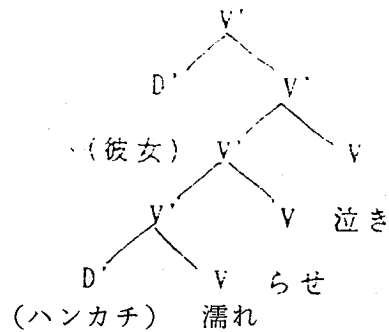
b.



a.



b.



(' nure- (sase (r) r→nurasu')

これを見ると、中国語の複合動詞形成においては内在項・外在項（‘她、手帕’）が主要部の左側に起こるや右側に起こるやを問わ、四角形で囲んだ最大投射の主語（‘手帕’）を飛び越すので、「記号列上の隣接性」に違反する。一方、日本語の複合動詞形成においてはこのような違反は見られない。それにも拘わらず、中国語の複合動詞‘哭湿’と日本語の複合動詞‘泣き濡らす’ともに許容される。‘哭湿’は複合動詞ではあるが複合述語ではなく、複合述語のみが「記号列上の隣接性」に従うという反論が起こるかもしれないが、「ゼロ仮説」(the null hypothesis) に基づき、複合動詞・

複合述語ともに隣接性の条件を守らなければならないという立場を取る方が理論上妥当ではなかろうか。それはともかく、福井氏の複合述語に関する隣接性の条件は複合述語そのものの定義に仕方にもよることながら、その他自然言語の形態的分類（例えば、膠着言語、屈折言語、孤立言語）や語順的分類（例えば、SVO, SOV, VSO）ともならみ合わせて、もっと言語事実（特に膠着言語に関する言語事実）の内情を検証する必要がある。

2.7 「代用形」(pro-form) の修飾可能性

- a. 日本語: 日本語の代用形（‘彼、彼女、自分、これ、それ、あれ’）は形容詞あるいは‘の’を用いた修飾、および「制限的關係節」(restrictive relative clause) による修飾を許す。
- b. 英語: 英語の代用形（‘he, she, it, this, that’）は一般に形容詞あるいは所有格による修飾を許さない。
- c. 中国語: 中国語の代用形（‘他（她、它）、自己、這（個）、那（個）’）も‘少年的我’（＝少年の私、若き日の私）、‘可憐的他’（＝可哀相な彼）、‘你的他’（＝あなたの彼氏）といった特殊な表現を除いては形容詞、所有格、關係節による修飾を許さない。

(i) a. 先週の 彼（は少し様子が変わった）

b. 若い 彼女（はそのことが少し気になった）

c. 昔の 自分（に戻りたい）

d. 今回ニューヨークで見た {彼／それ}

(ii) * last week's he, * young she, the former (* my) self.

{* he who / ?that which} I saw in New York this time

(iii) ??上一週的 他, ??年輕的 她, 從前的 自己, ? * 這一次在紐約看到的 {他／那個}

福井(1989)の分析と説明: 日本語の名詞の構造はバーレベル1 (N') の段階で繰り返しを許すので、統語的に閉じておらず、いくらでも修飾要素の追加を許す。これに対して英語の代用形はそれ自身が機能主要部 (D)

の位置に生成されるので、修飾要素の無限追加を許さない。(英語にも語彙範疇(N)を主要部に持つ代用形(‘one, that’など)が存在し、このタイプの代用形は日本語の代用形と同じように修飾を許す(例えば an expensive (red) one, that of New York, my former self’)。)

福井氏は Postal (1969) に端緒を発する英語の代名詞は深層構造では冠詞であるという分析に基づいて、英語の代用形は機能範疇(D)を主要部に持つが故に修飾を許さないというが、福井氏自身が挙げている ‘the real you, he who casts the first stone’ などの反例もあるので、もっと論証が必要であろう。また日本語の代用形は日本語固有の核語彙の中には存在せず、比較近代になってから西洋言語の影響の下に生じたものである。それゆえ、独特の文法範疇を形成せず、むしろ名詞に属するので名詞と同じような修飾を許すのであろう(この点結論的には福井氏の所説を支持する)。これに対して英語の代用形昔から核語彙の中に儼然として存在し、格変化の形態においても判然と名詞から區別される。日・英両語間における代用形のこの差異は、中・英両語間における代用形の差異にも見られ、この事実が中国語代用形の修飾可能性を高めているのであろう。しかし、英語の代用形に見られる冠詞(あるいは限定詞)用法は中国語の代用形(例えば ‘我們這些) 学生’ (= {we/us} (*these) students)、‘你這一個人’ (= *You this person)) にも見られ、その上 ‘這 (=この)、那 (=あの)’ などの限定詞と共に起るので、中国語の代用形は機能主要部(D)の位置に起こるというよりも、指定部の位置に起こって範疇投射を閉じるといった方が正しいのかもしれない(因みに中国語代用形の冠詞用法(‘你這一個孩子 (=お前という子)’ と所有格用法(‘你的這一個孩子 (=お前のこの子)’)とは形態的にも、意味的にも異なる。) また代用形の冠詞用法は日本語にも見られ(例えば ‘私達学生、お前達子供等、彼自身、あなた自身)、その限りにおいて日本語と英語の間に大きな差異は認められない。それゆ

え、日本語と英語の代用形の差異をただ語彙主要部 (N) と機能主要部 (D) の区別に求めるのは少し無理があり、少なくとももっと慎重な討論が必要であろう。

3. 結びに

福井 (1989) は彼自身が主張する「相対化 X バー理論」に基づき、核語彙における機能範疇の有無というただひとつのパラミターによって、日・英両語間の類型論上の差異につき興味深く且つ示峻に富む分析と説明を提供した。本稿はその分析と説明に対する普遍性を検証するため、もうひとつ中国語を加えて対照分析を試みで見た。その結果、中国語は英語よりも日本語に近いという類型論上の結果が出てきたが、これらの類型論上の差異がすべて機能範疇の欠如という唯一の理由で説明し尽くされるのかという問題については、今暫く結論を保留する。日・英・中三語における類型論上の差異については本文に挙げた数点の特徴の他に、関係節の形成、主語からの α 移動による取り出しなど幾つかの興味ある問題が残されてあるが、ここでは深入りをしない。今後語順的 (例えば韓国語など) あるいは形態的 (例えばトルコ語など) に日本語に近い言語を対象にして、反証、佐証そして「代りの分析」(alternative analysis) を吟味しつつ、もう一步深く福井氏の分析と主張を検証して見ることを希望している。

参考文献

- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in R. Jacob and P. Rosenbaum (eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, Ginn.
- _____. (1986) *Barriers*, MIT Press.
- Fukui, N. (福井直樹) (1986) *A Theory of Category Projection and its Application*, Ph.D. dissertation, MIT.
- _____. (1988) "Deriving the Differences between English and Japanese:

- .. A Case Study in Parametric Syntax,"English Linguistics 5.
- _____ (1989) 「句構造の理論と比較統語論」『言語』18:7,8,9,10。
- Gu'eron & May (1984) "Extraposition and Logical Form," Linguistic Inquiry 15.
- 久野 ' (1973) 『日本文法研究』大修館書店。
- Postal, P. (1969) "On SO-called 'Pronouns' in English," in D.A. Reibel and S. Schane (eds.) Modern Studies in English, Prentice-Hall.
- Tang T.C. (湯廷池) (1988) <普遍語法与漢英对比分析>
- _____ (1989a) <普遍語法与英漢对比分析:「X 標幟理論」与詞組結構>
- _____ (1989b) <「原則参数語法」与英漢对比分析>
- _____ (1990) <漢語語法的「併入現象」>